

## 第4章 牧畑の農業經營的特性

坂 本 四 郎  
竹 浪 重 雄

### 第1節 緒 論

隱岐牧畑は前述の通りわが国において珍しい農業のやり方である。その特徴については従来多くの文献が詳説している。錦織英夫氏は、<sup>(1)</sup>(1)強制耕作、<sup>(2)</sup>(2)土地所有の分散と経営地の分散、<sup>(3)</sup>(3)村民の放牧権平等と牧柵修理等の義務負担、<sup>(4)</sup>(4)土地所有、耕作、放牧の相助関係、<sup>(5)</sup>(5)経営の粗放性を挙げられている。細川善麿氏の説も大体以上と同様である。久保佐土美氏の牧畑<sup>(3)</sup>の特徴は西欧穀草式との比較であるからこれを省く。中野正雄氏は最近の報告で、<sup>(4)</sup>(1)牧畑耕種生産の自給性、<sup>(5)</sup>(2)経営の零細性、<sup>(6)</sup>(3)牧畑の兼業性、<sup>(7)</sup>(4)牧畑の耕種生産から養畜生産への重点移動、<sup>(8)</sup>(5)経営の粗放性、<sup>(9)</sup>(6)農業技術の停滞性と跛行性等について述べられている。又牧畑の衰退<sup>(5)</sup>については田中豊治氏の論文がある。

以上の如く牧畑の特性については既に種々述べられているが、これらは何れも適当な指摘であり、肯定されなければならないであろう。しかしわれわれは今回の調査の結果、最も重要な性格がぬけているように考えざるを得なかつた。それは牧畑の低生産性である。牧畑の低生産性こそ牧畑の諸現象を解くのに最も重要な鍵であると考える。牧畑の衰退現象も、牧畑の農家経済における従属的地位もこれによつて理解が容易である。故にここでは牧畑の低生産性を中心として、牧畑農業の經營的特質を究明することとする。

### 第2節 牧畑の低生産性

牧畑は土地利用上耕作と放牧とが輪換されるので、その生産性については耕種および養畜の両面から検討されなければならない。そこで本節においては、我々の調査した30戸の農家について、或いはその調査結果を基礎数字として、それぞれの面における土地および労働の生産性を、他の生産部門との比較において考察したい。

#### 第1 耕 種 生 産 性

1, **土地生産性** 牧畑の土地生産性についての考察に入る前に隱岐浦郷町における水田および本畑の土地生産力が、本土における水田および普通畑と較べてどのようなか、調査農家平均と島根県平均との比較によつて見ると才4~1表の如くである。すなわち調査農家の水田および本畑における平均反収は、県平均と較べて、稲作において略々同等であり、麦作

およびその他においてはむしろ若干上廻っている。

才4~1表 県平均反収と調査農家における水田および本畑の平均反収の比較

		稲作	麦作		雑穀作		甘藷作
			大麦	小麦	大豆	小豆	
実数	島根県平均	1.92	1.76	1.21	0.84	0.66	275
	調査農家平均	1.91	2.00	1.44	0.88	0.81	380
指数	島根県平均	100	100	100	100	100	100
	調査農家平均	99	113	119	105	123	138

備考 1, 何れも昭和27年度反収

2, 島根県平均は農林省島根統計調査事務所資料による。

一方が官庁の一般統計で過少と推定され、他方がわれわれの聴取調査による数字である点、両者の比較に正確を期することは出来ないが、大体の傾向として本町における水田の反収は本土以下であり、本畑の反収は本土と大差ないものと思われる。しかし牧畑の反収は本畑と比較して著しく低い。

牧畑の反収を本畑と比較すると、才4~2表の如くであり、麦作、大小豆作共にその反収は本畑の約 $\frac{1}{2}$ に過ぎない。中国農試経営部が、昭和27年海士村において調査された結果によ

才4~2表 牧畑と本畑の生産力比較

		反 当 收 量				反 当 労 力				労 働 1 日 当 生 産 量			
		大麦	小麦	大豆	小豆	大麦	小麦	大豆	小豆	大麦	小麦	大豆	小豆
実数	本畑	2.00	1.44	0.88	0.81	21.4	21.4	11.5	11.5	0.09	0.07	0.08	0.07
	牧畑	0.93	0.60	0.45	0.45	14.9	14.9	11.1	11.1	0.06	0.04	0.04	0.04
指数	本畑	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
	牧畑	47	42	51	56	70	70	97	97	67	57	50	57

ると「牧畑の反収は年々畑の三分の一というのが通念である<sup>(6)</sup>」とし、又田中豊治氏も「牧畑の収量は普通畑の半分程である<sup>(7)</sup>」と述べている如くに、牧畑の反収は著しく低い。牧畑においても部分的には、むしろ本畑よりも反収が多いといわれるところもあるが、殆んど例外的なものに過ぎない。浦郷町では普通、牧畑の大麦は反当1.1~1.2石、大小豆は反当0.7~0.8石といわれているが、この数量は本調査よりも多い。これは良く出来た年の精農家の成績であり、不作の年もあるし、個人差が大きく、著しく収量の少い農家が混在しているため、全部の平均ではより少くなるのである。

2. **労働生産性** 本畑と比較せる牧畑の反当労働日数は、前掲表4~2表に見る如く、麦作の14.9日、大小豆作の11.1日は、本畑を100とせる指数でそれぞれ70,97であり、粗放と称せられる牧畑においても、可成りの労働が投ぜられていることが分る。この数字は従来<sup>(9)</sup>の文献よりも多くなつてゐる。本調査では、牧畑耕作に畜力を使わない農家も2戸含まれており、距離の遠いもの、小面積しか耕作しないものも含まれるので、実際にはより多くの労働が必要のようである。先に見た如く、反収が低いところから、牧畑における労働の生産性は当然低くなり、前掲表4~2表の如くであつて、大麦作はまだしもであるが、他は何れも指数50台で著しく低い。

3. **収益性** 次に牧畑における耕種生産の収益性について、本畑および牧畑における反当および労働1日当の収益性を比較検討したかつたのであるが、我々の調査では本畑、牧畑別、あるいは各作物別の生産費を算出するに至らなかつた。そこでここでは一応各生産部門の反当および労働1日当の粗生産価額を算出して、大体の傾向を推察することとした。表4~3表がそれである。

表4~3表 部門別反当および労働1日当粗生産価額

		耕 種										養 畜 (牛馬)	養 蚕 (繭)
		水田 稻	本 畑					牧 畑					
			大麦	小麦	大豆	小豆	甘藷	大麦	小麦	大豆	小豆		
実 数	単 価	8,000	3,140	4,350	6,870	8,000	35	3,140	4,350	6,870	8,000	/	(1,488)
	反 收	1.91	2.00	1.44	0.88	0.81	380	0.93	0.60	0.45	0.45	/	16.3
	反当粗生産価額	15,280	6,280	6,264	6,046	6,480	13,300	2,920	2,610	3,092	3,600	1,592	24,254
	反当投下労働	37.1	21.4	21.4	11.5	11.5	17.0	14.9	14.9	11.1	11.1	(93)	(95)
指 数	反当指数	100	40	41	40	42	87	19	17	20	24	10	158
	労働1日当指数	100	71	71	128	137	190	48	43	68	79	101	64

備考 1. 作物別単価は浦郷町農協、昭和27年度買入価格による。

2. 養畜部門については、後に詳述する。投下労働93日は1戸当平均で、反当りではない。

3. 養蚕については、単価は調査農家の販売価格により、労働日数は昭26年度島根県繭生産費調査によつた。ただしこの95日は過多であつて、本町ではより少ないと推定されるから、労働1日当粗生産価額はより大となる。

すなわち牧畑の反当粗生産価額は3,000円前後であつて、本畑の約 $\frac{1}{2}$ 、水田の稲作や養蚕に較べると著しく低く、また労働1日当粗生産価額も、大小豆作は比較的有利のようであるが、主作物たる麦作においては200円に足らず、これまた著しく低い。

以上の如く、牧畑の生産力は他の生産部門の生産力に較べて著しく低く、本畑と比較すれ

ば大雑把に見て約半分である。しかし牧畑は放牧地としても利用されるので、牧畑の生産性について次に養畜生産の面より検討することとする。

## 第2 養 畜 生 産 性

養畜に関する考察においては、牧畑の放牧が共同放牧となつている関係上、主として30戸の調査農家の調査結果を基礎として、浦郷町全体について考察を行う。

1. **牧養力** 本町における放牧牛馬頭数、および放牧地面積はそれぞれ才4～4表、才4～5表の如くである。すなわち牧畑中山林で、放牧不適地となつているところを除いた658町歩の放牧地に、665頭の牛馬が放牧されて居り、1頭当放牧地面積は約1町歩である。現在我国で用いられている

才4～4表 放牧牛馬頭数

	牛			馬	合計
	成	犢	計		
浦郷町	570	50	620	45	665

備考 浦郷町農協、昭和27年度資料による。

才4～5表 放牧地面積

	山 林	放 牧 地					合 計
		草生地	藪小灌木	荒地	畑地	計	
実数	3,031.6	1,672.0	1,654.4	1,680.3	1,576.2	6,582.9	9,614.5
%	32	17.5	17	17.5	16	68	100

備考 中国農試、隠岐の牧畑経営より引用作製。

放牧畜1頭当に対する放牧地所要面積の基準は、

幼馬 1.90ha 幼牛 1.68ha 成馬 2.37ha 成牛 2.26ha

であるから、この基準と比較すると、本町における1頭当放牧地面積1町歩(≒1ha)は極めてその密度が高いのであつて、すなわち小面積により多くの放牧畜を牧養しているのである。隠岐牧畑の牧養力に関する文献は極めて少いが、錦織英夫氏が黒木村で調査されたものによつて、林地をも含めて1頭当1.87町歩で、基準よりもなお密であり、一般に牧畑における単位面積当放牧頭数の多いことを示している。なお本町における放牧牛馬頭数の変遷を見ても、大正中頃までは年々1,000頭以上の牛馬を放牧していたのであつて、その後草生の悪化はあつたとしても、牧畑の牧養力は可成り大きいものと推察される。

2. **収益性** 調査農家における養畜収益額は才4～6表の如くであるが、この表の1頭当の数値を基礎として、浦郷町全体の養畜収益性を推算し、放牧地1町歩当の収益額を算出した。すなわち才4～7表の如くであり、1町歩当約10,000円余であつて、土地利用上極めて少ない。

才4～6表 調査農家における養畜収益額（中小家畜を除く）

	放牧頭数	増殖額	経 営 費			収 益 額
			現金支出	償却費	計	
30戸計	64	1,035,500	99,410	192,000	291,410	744,090
1頭当	—	16,180	1,553	3,000	4,553	11.627

備考 経営費に建物費及び租税公課を含まない。

才4～7表 浦郷町における牧畑養畜収益性

	放牧頭数	増殖額	経 営 費			収 益 額
			現金支出	償却費	計	
町計	665	10,759,700	1,032,745	1,995,000	3,027,745	7,731,955
放牧地 1町当	1.0	15,917	1,528	2,951	4,479	11,438

次に労働の生産性について云えば、調査農家の養牛労働日数は才4～8表の如く、平均93

才4～8表 養牛労働（1戸当）

收柵修理	転 牧	診療注射	種 付	監 視	採 草	給 餌	計
3日	4	2	1	10	34	39	93日

備考 1, 1戸当飼養頭数は平均成2.2頭, 仔1.4頭, 計3.6頭。

2, 冬季の舎飼期間は平均114日であり, はかに畜役を使用する間舎飼する農家もある。畜役使用期間は平均1戸当38日である。

日を要して居り, 労働1日当の収益額を算出すると才4～9表の如く一日当 291円となり, 水田, 本畑および牧畑をも含めた耕種生産全体の1日当収益額を計算すると, 242円であつて, これと較べて若干多い。すなわち牧畑における養畜生産は, 牧畑そのものの牧養力は可成り大きいけれどもそれでもなお単位面積当収益性は低く, しかしながら, 労働1日当収益性は比較的高い, と云うことが出来る。

才4～9表 養畜労働1日当収益額（30戸平均）

粗 収 益	経 営 費				差 引	労 働 日 数	1 日 当
	飼 料	家畜費	保険料	計			
38,944	2,056	8,636	1,249	11,941	27,003	93	291

備考 家畜費中に減価償却費も含まれる。

### 第3 低生産性の原因

1, 耕種生産性の低い原因 牧畑の土地生産性および労働生産性が何故このように低いか, と

云う原因について次に若干の考察を試みたい。

(1) 土地生産性の低い原因

- (a) 自然的要因として先づ牧畑の土地条件の劣悪性があげられる。すなわち地形的には、傾斜地につくられた段々畑は、エロージョンによる土の流失と、土壤の養分あるいは有機質の流亡が著しいものと思われ、又表土が薄いために保水力に乏しく、旱魃の害を蒙り易いために反収は少く、かつ作況が不安定である。次に風、特に冬季の季節風たる北西風による低温、過旱あるいは塩風等により、作物の生育が甚だしく阻害されるものと思われる。
- (b) 農業経営的要因としては、才1に牧畑農業が極めて粗放に経営されると云う点から、牧畑の土地生産性を規制する種々の要因が見出される。先づその1に、牧畑は資本的に粗放であつて、肥料は殆んど施用せられず、薬剤は全く使われず、農具も「隠岐スキ」と称する極めて原始的なものを用いているのであつて、牧畑に投ずる経営費は極めて少い。又地力維持のためには、牛馬の放牧と、大小豆を含む4年3作の輪作および休閒による地力の維持補給の外に特にそのために考慮が払われることなく、かくて年々地力が減退して来ていることは容易に想像されるのである。その2として労働的粗放であることであるが、これは必ずしも労働日数が少いと云うことではなく、労働の大部分が畑地の耕起のために投ぜられ、作物の肥培管理のためには殆んど労働が投ぜられていない、と云う主として労働の質的粗放と云う意味である。すなわち牧畑における作業別反当投下労働を本畑と比較し

才4~10表 作業別反当投下労働

	人 力				畜 力			
	麦 作		大小豆作		麦 作		大小豆作	
	本畑	牧畑	本畑	牧畑	本畑	牧畑	本畑	牧畑
耕起, 施肥, 整地, 播種	4.8	7.1	2.8	3.4	2.0	2.9	1.5	1.6
中耕培土	3.8	0.1	3.8	2.5	—	—	—	—
除草	3.6	1.3			—	—	—	—
追肥	2.9	0.8	—	—	0.8	0.0	—	—
麦踏, 土入	0.2	—	—	—	—	—	—	—
刈取, 乾燥	3.8	3.4	2.8	2.8	—	—	—	—
運搬, 脱穀, 調製	2.3	2.2	2.1	2.4	0.2	0.7	0.2	0.6
合計	21.4	14.9	11.5	11.1	3.0	3.6	1.7	2.2

て見ると才4~10表の如くであり、牧畑における麦作においては、投下労働(人力)14.9日のうち約 $\frac{1}{2}$ に近い7.1日が耕起のために費され、(畜力においては農産物運搬以外は殆んど全部耕起に使われる)、又播種の方法が撒播、しかも「底マキ」等、極めて粗放なやり

方のため中耕除草がやり難く、又実際にも殆んど行われていない。その3には、牧畑がこのように資本的にも労作的にも粗放に経営されるため、作物の品種改良が行われず、又同時に改良された優秀な品種を牧畑に栽培することも出来ない。次に牧畑の土地生産性を規制している才2の要因として、牧畑がその性質上強制耕作下にある、と云う点である。すなわち牧畑の耕作者は、一定の時期が来なければ牧畑へ作付をすることが出来ないし、又一定の時期以上に亘る作物を作ることも出来ない。この点で牧畑耕作者はその栽培する作物に制限を受けるわけであり、しかも牧畑の作物が麦類、大小豆、エンドウ、アワ、キビ、ヒエ、ソバ等の何れも粗放的作物である点、牧畑を集約的経営にとり入れることが困難である。更に才3に、牧畑の質の低下と云うことがある。すなわち近年水田、本畑の増加に伴い、相対的に牧畑が減少して来たが、残されたところは概ね土地条件の劣悪なところであり、このことも牧畑の土地生産性の低い間接的な要因をなしている。

(2) 労働生産性の低い原因 以上述べた土地生産性の低い原因はすべて労働生産性の低い原因となるが、その外に

(a) 自然的要因として、牧畑が極めて急峻な傾斜地にあつて、階段状に段畑をなし、各畑の面積は小さく、且つその形が不整形である等の地形上の制約が、資材並びに農産物運搬の不便、段畑耕作上の不便等、労働の能率を妨げる方向に大きく働いている。又各牧に至る距離の遠く且つ急峻であることも、労働の生産性を低める要因となつている。すなわち農家より牧畑内耕地に至る平均距離は実に25町であり、又才4～11表にみる如く、牧畑内耕地の $\frac{1}{3}$ が1里以上のところにあり、 $\frac{2}{3}$ が20町以上の距離にある。しかもこの遠い牧畑に至る農道は、道巾も狭く且つ險阻で、車馬の利用は殆んど不可能である。従つて資材並びに農産物の運搬は大部分人力又は畜力に依存しなければならず、あるいは舟によることもあるが、何れの場合も労働能率を妨げることが著しい。

才4～11表 距離別牧畑内耕地個所数(21戸)

	近距離 5町未満	比較的近距离 5町～10町	中距離 10町～20町	比較的遠距離 20町～1里	遠距離 1里以上	計
実数	5	2	16	20	20	63
%	8	3	25	32	32	100

(b) 農業経営の要因としては、土地生産性の低い原因のところ述べて如く、才1に農業技術の低位性があげられる。才2に牧畑はその性質上牧畑地の所有および経営の分散が不可避である。と云うのは、牧畑の1地区のみを経営するときは、4年に1回は何等の収穫がなく、しかも残る3回もそれぞれ収穫する作物を異にするわけであり、従つて毎年恒常的な農業生産を行うためには、4区内にそれぞれの所有地、耕作地を有さねばならぬことと

なるからである。耕地分散の傾向を見ると、才4～12表の如く30戸中の $\frac{1}{3}$ が4牧全部において牧畑を経営しており、約 $\frac{2}{3}$ が3牧乃至4牧に牧畑を経営している。このように所有地あるいは経営地が各地区に分散していることは、農家より耕地への距離をますます大ならしめ、いよいよ労働の生産性を阻害する。

才4～12表 牧畑経営数別農家戸数

	無所有	1 牧	2 牧	3 牧	4 牧	計
実数	2	4	5	9	10	30
%	7	13	17	30	33	100

## 2. 養畜生産性の低い原因

牧畑の養畜生産について牧養力が大きいことを前に述べた。牧養力が大である原因としては、自然的要因として気候条件、殊に気温および雨量が草の生長に適しているものと思われる。又農業経営的要因もある。すなわち才1に、牧畑の土地利用の組織が放牧地としては輪換式放牧地の一類型と見做すべきものであつて、輪換式放牧は無制限連牧に較べて有利である、と云うことである。しかも才2に、この輪換が単なる輪換ではなく、耕種と組合わされた耕牧輪換であり、しかもその輪換の方法が初夏の草生力旺盛なる時期には放牧畜を1牧にまとめて放牧するが、秋になつて草生力衰えると、2牧あるいは3牧に分けて放牧する等、極めて合理的な輪換法である。更に才3に、放牧と放牧との間の時期には作物が栽培されるので放牧地が耕作されることとなり、耕作せざるところと較べて普通3倍の草生があると云われている<sup>(14)</sup>。以上の如き諸原因がよつて牧畑の牧養力を大ならしめている。けれども牧畑の草生は近年悪化していると云われる。その原因は、根本的には牧畑の土地私有制と共同放牧との矛盾にあるが、現実的には牧畑耕作の減少、不良草や不良灌木叢林の増加、地力の消耗等にある。

次に牧畑における養畜生産の収益性は、単位面積当は低いが、労働1日当では比較的高いと云う点である。単位面積当の収益性が低いのは、主として牧畑の養畜飼養形態が放牧と云う最も粗放な経営形態をとつているためである。従つて年間における牛馬の飼養管理も充分でなく、特に産犢率の低い点、および品種改良あるいは個体の資質改良が遅延している点等が大きな原因となつている。産犢率の低いことは、飼養管理の不充分に原因する発情の遅延と、人工交配による発情牛発見の困難に原因する。又誤つた種牛の導入は犢の資質を今なお悪くしており、交通地位の悪いこともあつて、牛価は本土の市場より約30%位安い。

しかし乍ら一方、年間を通じての養畜労働は極度に少なくて済む(才4～8表参照)と云う点で、労働の生産性は比較的高い。すなわち放牧時期が来ると直ちに牛馬を牧畑に追いやり、あとは資本も労働も投ずることなく、ただ犢の生産を得て足れりとする程度に粗放な牧畑経営において、一応目的を遂げているものの如くである。しかも近年牛価が比較的高かつたことも、

労働の生産性の比較的高い原因となつている。しかし最近牛価の少々低落気味のところから、養畜農家の間に家畜の個体の資質向上と云う点に関心が持たれて来た。

## 第4 む す び

以上牧畑の生産性について、耕種および養畜の両面より之を考察して来たが、本来牧畑は一つのものであつて、4年を1期とし、耕種および牧畜が輪換されているわけである。しかもその輪換が非常に合理的に組合されており、作物の作付と家畜の放牧とがほぼ交互に行われ、作物の作付によつて地力の消耗したのを休閑を伴う放牧をなし、以て休閑と牛馬の糞尿とによつて地力を維持回復する、と云うのである。かくの如く、耕種と養畜とが非常に巧みな有機的一組織をなした経営のやり方は、牧畑の如き本来土地条件が劣悪なところを、経営内にとり入れるには一応合理的な方法であらうと思われる。しかし乍ら、このような方法も長い目で見た時には、どうしても掠奪式経営とならざるを得ないものであつて、地力は次第に低下して来ているものと思われる。牧畑の生産性について、過去の文献<sup>(15)</sup>によれば、反収の少いことは認めつつも、労働がさらに少いために、労働の生産性から云えば本畑よりも却つて有利であるとし、この点が隠岐牧畑が有利であると云う主張の主たる論拠となつているようである。我々の調査においては、土地の生産性は耕種においても、養畜においても著しく低かつた。そして労働の生産性についても、耕種のそれは本畑と比較して決して高くなく、むしろ著しく低かつた。ただ養畜において若干高いので、ある程度は耕種において低いのを補っているかも知れない。しかし乍ら、牧畑は決して有利な経営の場ではない。それはけだし零細な農業経営において、他に雇傭を求め得ない余剰労力と、および食糧自給のための最後の拠り所ではなからうか。若しも牧畑が有利なものであるなら、耕境は拡大されて牧畑の耕作は増加しなければならぬし、そうでなくても衰退することはない筈である。しかし次節以下に述べる如く、現実には牧畑は量的に、あるいは質的に衰退して来ているのであつて、その主たる原因は以上述べた牧畑の低生産性にあるものと思われる。

## 第3節 牧畑の衰退傾向

### 第1 牧畑衰退の形態

牧畑農業はその発生、発展の当時においては、耕種生産と養畜生産の結合による土地および労働力の合理的な利用方法として、極めて巧妙なやり方<sup>(16)</sup>であり、相対的に高い生産性をもつていたと推測できる。それ故に隠岐島の全域にわたり広く存在したのである。しかし社会経済が進歩し、農業技術も発達してくると牧畑農業も古い、生産力の劣つた農業として新しい生産力の高い農業にその地位を譲らざるをえなくなるは当然のことである。牧畑の衰退もこの歴史の

法則に支配されているものと見なければならぬ。

1. **牧畑の減少** 牧畑の減少は島後において著しい。それは牧畑数または牧数の減少であり、当然に牧畑面積の減少である。その大要は才4～13表が示す通りであり、牧数の著しい減少が判明する。しかし牧面積の減少は牧数の減少より少く、ことに昭和2年から昭和24年の間

才4～13表 島後における牧畑の減少

	明治 16年	同 30年	同 44年	昭和 2年	同 10年	同 24年
牧 数	47	41	28	14	13	7
牧面積	町一	734	—	146	—	310

(備考)

- (1) 明治16, 44年は田中豊治; 隠岐牧畑の衰退と農業経済(農地経済, 10の8, 60頁, 59頁)より
- (2) 明治30年は久保佐土美; 隠岐の牧畑式の研究(鳥取農学会報1の3の別刷)4～5頁より
- (3) 昭和2年は錦織英夫; 島の農業形態—隠岐の牧畑式農業経営について—(島根県総合開発資料No.9のリプリント)4頁より
- (4) 昭和10年は細川善麿; 隠岐牧畑の展望(島根県総合開発資料No.10)18—19頁より
- (5) 昭和24年は島根県畜産課の資料より

に増加している。これは後述する如く本当の牧畑でなく、僅少な耕作地をもつ輪換放牧地にすぎないのである。島前の牧畑は明治中期頃牧畑数においては島後と大差ないが、その面積において著しく大きく、その推移も島後と異なり、牧畑数、牧畑面積において減少傾向を示していない。その状況は才4～14表の通りである。このように牧数、牧畑面積の減少は島後に著し

才4～14表 島前における牧畑の推移

	明治16年	同 30年	同 44年	昭和2年	同 10年	同 24年
牧 数	43	45	41	43	44	45
牧面積	町一	4,178	4,649	4,407	3,005	4,333

(備考) 引用文献は才4～13表の通りである。

く、島前では見られない。それでは島前において牧畑は衰退していないかと云うとそうではなく、質的に衰退しているのである。

2. **牧畑内耕作地の減少** 前述の通り牧畑の本質は土地の耕作と家畜の放牧の輪換にあるが、その耕作が次第に減少しているのである。昔の牧畑は殆ど全面積が耕作と放牧が輪換されていたが、浦郷町においては「嘉永2年までは耕地全部が牧畑にて」……「同年庄屋、渡辺義三の考案にて牧畑と年々耕作する土地を区別し」<sup>(17)</sup>て以来、本畑、水田が牧畑から独立してゆき、牧畑耕作減少の才一步となつた。明治10年地租改正以来牧畑は切替畑と称せられ、今日においては台帳面は一般に畑とされ、台帳上は本畑と区別されていないこと、従つて今回の農家における調査においても牧畑内の土地は現在松林、草地であつても、殆ど全部が畑の地目となつていること、約37年間浦郷村長を勤め、牧畑事情に詳しい今崎半太郎氏は、40～50年前は浦郷牧畑には殆ど山林はなく、放牧牛馬が夏の炎天下に憩う場所がないから植林をして日陰を作る必要を感じたと語られていること等により、牧畑内耕作地が現在より遙に広がったことが

推測できる。それが現在どのようになっているだろうか。才4~15表を見られたい。この表は

才4~15表 隠岐牧畑の牧数、牧面積及び牧畑内耕地面積

項目	地方 町村 牧畑	島						前				島後		合 計	
		知夫村		浦郷町		黒木村		海士村				東郷村	五箇村		
		知夫	浦郷	宇賀	別府	美田	計	海士	布知	福井	崎	計	大久		久見
		町	町					施知	井						
昭和二十四年	牧数	4	6	4	4	5	13	14	3	5	22	3	4	52	
	牧面積	533	945	72	40	1,028	1,140	1,121	184	411	1,716	184	126	4,644	
	牧畑内耕地面積	115	155	7	0	10	17	61	0	177	238	7	1	633	
	同上%	22	17	10	0	1	2	5	0	43	14	4	0	11	
二十八年	牧数	4	7	4	4	4	12	14	3	5	22	3	4	52	
	牧面積	578	874	469	198	391	1,058	919	184	300	1,403	184	126	4,223	

(備考) 島根県畜産課資料より作成した。浦郷牧畑の由良牧と美田牧畑の後山牧は各々一牧として計算し、浦郷牧畑の犬牧は計算せず美田牧畑の犬牧としてのみ数えた。なお浦郷牧畑の牧数変化は島根牧の復活であり、美田牧畑の減少は宮谷牧の消滅である。昭和24年の面積は不正確のようである。ことに黒木村において甚だしい。訂正の方法がないのでそのまま掲げる。

町村からの牧野に関する申請書から作成したが、あまり正確ではないようである。しかし他に資料がないので昭和24年の牧畑内耕地面積比率を見ると如何に低いか判る。比較的比率の高いのは海士村の崎牧畑、知夫牧畑、浦郷牧畑、黒木村の宇賀牧畑であり、その他は殆ど耕作されていないと見ることが出来る。ただしこの牧畑内耕地比率は実際より低く過ぎはしないかとも考えられる。今回調査において前浦郷町畜産組合長は約20%位(実面積約240町歩)と語っており、浦郷町30戸の調査農家平均は同比率が42%となつているからである。

前述昭和24年の牧畑内耕地比率を昭和2年のそれと比較すると才4~16表の通りであり、著

才4~16表 島前牧畑の耕地比率減少

	海士村	黒木村	浦郷町	知夫村	計
昭和2年	63%	44	88	83	64
昭和10年	20	25	34	33	28
昭和24年	14	2	17	22	12

(備考) 昭和2年は錦織英夫；前掲書4頁より、昭和10年は古賀博；牧畑農業の経済価値とその応用性(畜産, 23の2)より、昭和24年は県畜産課資料より計算した。

才4~17表 黒木村の牧畑内耕地の減少

	牧畑総面積	牧畑内耕地面積	牧畑内林地面積	耕地割合
大正4年	2,475	1,561	914	63%
大正15年	1,800	702	1,098	39
昭和12年	1,436	338	1,096	24

(備考) 大正4, 15年, 久保佐土美；前掲書, 9頁 昭和12年, 四宮恭二；隠岐の牧畑農業；31頁

しい減少が見られる。なお黒木村における牧畑内耕地の減少状況を久保佐土美氏及び服部力氏の研究から引用すると才4~17表の通りであり、約10年間に牧畑内耕地が約1/2に減じ、林地そ

の他が増加していることが判る。

以上のような牧畑内耕地の減少は牧畑面積の減少、すなわち量的な減少は殆どないのであるが、質的な衰退を意味している。その衰退に代るものは牧畑内の林地と草地、ことに前者の増加である。島後においては植林され、島前においては牧畑の放棄による黒松の自然成長<sup>(19)</sup>による。浦郷町においては約900町歩の牧畑中、約400町歩が林地となり、黒木村や海士村の北部においてそれ以上の割合で林地化しているのである。すなわち牧畑内耕地の少ない牧畑は実質的には牧畑の本質を失い、ただの輪換放牧地になりつつあると云うことができる。

3. 牧畑内耕地の作付減少 牧畑の質的な衰退は以上の如き牧畑内耕地の減少に止まらない。減少した耕地に対する作付回数<sup>(20)</sup>の減少が進行しているのである。今回浦郷町で調査した結果によると才4～18表の通りである。牧畑の標準作付順序は前にも述べた如く4年5作であるが、

才4～18表 浦郷町における牧畑の耕作利用状況（昭25～28年）

項 目	地目 作付回数 型 麦山 栗山 空無山 農家階層 空山	牧 畑 内 耕 地										牧畑内耕地以外				合 計
		4年5作	4年4作		4年3作			4年2作		4年1作	小計	草地	林地	荒廢地	小計	
		基本型	A	B	A	B	C	A	B	A	計					
		麦一大小豆	麦一大小豆	麦一大小豆	麦一大小豆	麦一大小豆	麦一大小豆	麦一大小豆	麦一大小豆	麦一大小豆	麦一大小豆	—	(全)	(全)	(全)	
	栗山	栗	栗	稗	休	栗	栗	休	休	休	—					
	空無山	豌豆一大小豆	休一大小豆	休一大小豆	休一大小豆	休一休	休一大小豆	休一休	休一大小豆	休一休	—	休	休	休	休	
	空山	休	休	休	休	休	休	休	休	休	—					
実 数 (反)	A	—	0.8	—	0.9	0.3	—	0.5	—	0.1	2.6	2.6	1.6	—	4.2	6.8
	B	—	0.3	—	6.3	—	0.4	0.6	—	1.2	8.8	3.5	7.2	0.6	11.3	20.1
	C	—	0.5	0.2	9.4	0.6	—	0.5	1.1	0.9	13.2	8.0	10.0	—	18.0	31.2
	平均	—	0.6	0	4.3	0.3	0.1	0.5	0.3	0.6	6.7	4.1	5.0	0.2	9.3	16.0
百 分 率 (%)	A	—	12	—	13	5	—	7	—	2	39	38	23	—	61	100
	B	—	1	—	31	—	2	3	—	6	43	18	36	3	57	100
	C	—	2	0	30	2	—	2	3	3	42	26	32	—	58	100
	平均	—	4	0	27	2	1	3	1	4	42	26	31	1	58	100

(備考) 農家階層のA, B, Cは耕作規模別であつて、田:本畑:牧畑内耕地=1:½:¼の比率で換算合計し、Aは3反未満、15戸平均、Bは3~5反、8戸平均、Cは5反以上、7戸平均、平均は30戸の平均である。なおA階層には漁業を主とする兼業農家、日雇を主とする兼業農家、家族数の少ない寡婦の農家等が含まれていることを断つておく。以下A, B, Cの階層区分は同様である。

現在そのような作付は皆無である。今崎前村長の談によると空無山の豌豆や、栗山の粟、稗は30~40年前から減少した。現在最も多いのは4年3作であつて、その内でも栗山の粟、稗、空

無山の豌豆を休閒する方式であり、牧畑総面積の27%、牧畑内耕地面積の64%に当る。さらに作付を減少して4年2作、4年1作までが現れているのである。さらに4年4作と4年3作中にある栗山の粟、稗は昔は穀物として食用に栽培したのであるが、現在は殆ど飼料用であり、所謂「駄よけ」の粟、稗である。「駄よけ」については後で詳説されるであろうが、栗山の冬季舎飼の飼料用刈草の確保の目的で少面積作付されるに過ぎない。以上のように牧畑内耕地における作付回数は少くなりつつあるのである。

4. 養畜数の減少 牧畑は耕種生産とともに養畜生産が重要な一半であるから、この面からも牧畑機能の推移を見なければならぬ。しかし牧畑は両生産が補合関係にあり、相扶けて利益を他に与えながら、他から利益を受けながら成立しているのであるから、一方の衰退は他方の衰退に影響するであろう。耕作の減少は草生を悪くし、林地の増加もまた草生の悪化のみならず、放牧地の減少となり、養畜生産の減退となるであろう。明治30年以後における島前における牛馬飼養数の変遷を見るとオ4～19表の通りである。すなわち明治中期末に比し現在は約

オ4～19表 島前の牛馬飼養数の変遷

	島 前			浦 郷 町		
	牛	馬	計	牛	馬	計
明治30年	5,531	1,014	6,545	850		
“ 40年	3,729	853	4,582	861	262	1,123
“ 44年	4,513	655	5,168	959	236	1,195
大正3年	4,704	737	5,441	972	241	1,213
“ 5年	4,382	688	5,070	1,012	235	1,247
“ 7年	3,377	613	3,990	844	234	1,078
“ 15年	2,455	354	2,809	414	99	513
昭和3年	2,797	359	3,156	597	98	695
“ 5年	2,690	386	3,076	562	126	688
“ 10年	3,458	393	3,851	966	186	1,152
“ 16年	2,802	409	3,211	667	191	858
“ 21年	1,848	175	2,023	387	56	443
“ 25年	2,666	148	2,814	578	50	628
“ 28年	1,582	71	1,654	620	45	665

- (備考) (1) 明治30年は県統計書(明治30年度)による。  
 (2) 明治40年～昭和5年までは久保佐土美氏; 前掲書, 9頁及び同氏; 農業経営方式の研究, 20頁  
 (3) 昭和10～25年は中国農試経営部; 前掲書, 33頁  
 (4) 昭和28年, 県統計課統計月報; 46号及び浦郷農協調査

半減しているのである。前浦郷村長、今崎氏談の浦郷町明治37年頃牛 1,200頭、馬 300頭、計 1,500頭に比べると現在は約44%に減じているのである。ことに牛よりも馬の減少が甚だしい。しかし家畜の減少は牧畑耕作の減少程に著しくはない。牧畑の生産は耕種生産よりも養畜生産に重心が移りつゝある。牧畑の衰退は耕種生産においてさきに進行し、養畜生産は減少しつゝもその速度はおそく、牧畑の耕作と放牧の輪換から放牧だけの輪換へと進むのである。

## 第2 牧畑衰退の地域性

1, 島前と島後の差異 牧畑の衰退は前述の通り島後は島前に比し早期におこり、その程度が甚だしかつた。明治中期までは牧数において島前、島後は相似ているが、現在は島前45牧に対して、島後は7牧、牧畑内耕地は島前 626町に対して島後は8町にすぎない。斯く島後では殆ど全部の牧畑が崩壊したが、島前では依然として牧欄に囲まれた牧畑が島全面積の大半を占めているのである。

2, 島前における地域性 島前における牧数、牧畑面積は明治中期から変化は少ないが、牧畑内耕地は著しく減少した。前掲表4～15表の如く各牧畑により、その減少は著しく異なる。知夫、浦郷、崎各牧畑は比較的多く牧畑内耕地を残存しているが、その他の牧畑は森林化して耕地を著しく減少した。すなわち海土村中北部では森林化が進み福井牧畑の先牧が消滅<sup>(20)</sup>、海土、布施両牧畑はその構成を変化したし、又黒木村でも同様に森林化が著しく、ことに美田牧畑では宮谷牧は最近消滅した。

## 第3 牧畑衰退の時期

牧畑の衰退は何時頃から始つたかは判然としない。島後の牧畑は明治10年代より減少を始め大正の初期から急激にその面積が少くなつた。<sup>(21)</sup>明治30年から植林が盛んに行われ次第に森林化が進んだ。島前における森林化は大正初期の才一次 歐洲大 戦時好景気の頃である。養蚕の発達、出稼ぎや離村の激増、漁業の発達によつて牧畑は放棄されて森林化した。浦郷町松林の樹齡が大部分30～40年生であるのはそれを物語る。昭和農村恐慌時の経済更生計画による牧畑の恢復もその衰退の大勢を動かすべくもなかつた。かく牧畑は資本主義の発達と共に衰え、好景気において急に減じ、社会経済の波に左右されていることを知る。

## 第4 牧畑衰退の原因

1, 牧畑耕作における生産性の低位 牧畑の発生及び発達した当時は封建時代であつて、農業技術の程度も低く、粗放的の農業であつたから、水田や本畑と牧畑耕作の土地生産力の差異は大きくなく、労働生産力からすれば更らに差は少なかつたであろう。牧畑の耕種と養畜の補合関係によつて合理的な、巧妙な土地利用方法として相対的に生産力は高かつたと考えられる。

それ故に隠岐島全域に拡がったのである。しかし封建制が崩壊し、資本主義社会が生れて、科学技術が発達してくると事情は変化する。牧畑耕作は前述の如く技術の停滞性の故に生産力の発展は殆ど止まり、地力の消耗と共に減少さえあつたかも知れない。他方水田作、本畑作、養蚕、林業、漁業等は技術の発達によつて、又社会的需要の増大に伴う価格の上昇によつて発達し、生産力を高め、収益力を大きくしていつたのである。すなわち牧畑耕作の生産性とその他の生産性の差は拡大され、前者の相対的生産性は益々低下してゆくこととなつた。さらに出稼ぎや、離村の機会増加もなお一層以上の傾向を強化する。

農家は生産手段としての生業に家族労力を投ずるのであるが、その投下は種々の部門がある限り投下の選択がおこなわれ、最も生産性が高くなるように選択し、組合せられるはずである。家族労力の雇用が満される限りにおいて、高い生産性の部門から採用され、低い生産性部門は捨てられることとなる。またその選択における生産性は主に収益力であるが、労働苦痛度、生産物の使用価値、生産の安全性等も考慮されるであろうが、ここでは説明を簡略にするためこれらを省略する。農家の生業に牧畑耕作、牧畑養畜、水田作、本畑作、養蚕、林業、漁業、被傭、出稼、等があり、転職も自由である場合、最も有利な組合せの部門が選択されるであろう。牧畑耕作が相対的に生産性が低ければ、換言すれば牧畑耕作が限界生産性を示すとすると最も早く捨て去られるであろうことは明かである。それ故に資本主義経済の発展に伴い有利な生産が隠岐島に導入されると共に、牧畑耕作は大きく動揺し、隠岐島にそれらの生産が発達すると牧畑耕作は減少するのである。牧畑衰退現象はこのように理解することが最も合理的であると考えている。牧畑耕作よりも有利な生産部門、生産性の高い生産部門として発達し、牧畑衰退の原因となつた生産部門の事情を簡単に観察しておくこととする。

(1) 水稲作 米は国民の主食であり、封建時代から奨励もされ、保護もされ、隠岐島においても水田可能な所には開田された。明治以後その傾向は強化され、造田技術も栽培技術も投資も進み、水田は増加した。水田面積の多かつた昭和10年頃の1戸当を見るとオ4～20表の通りである。すなわち島前と島後を比べると島後に多い。地形のしからしめるところである。

オ4～20表 1戸当耕地面積(昭・9)

		田	畑	計
島 後		4.0	2.9	6.9
島	平均	1.8	4.9	6.7
	海士	2.8	7.4	10.2
	黒木	1.8	2.9	4.7
	浦郷	1.0	3.6	4.6
前	知夫	0.9	4.2	5.1

(備考)

- (1) 細川善磨；前掲書21頁及び島根県隠岐総合開発計画書より
- (2) 最近の統計は農家戸数の増加と供出の関係で一戸当面積は激減している。しかし町村別差異の傾向には差異はない。

島前においては海土村と黒木村に多く、知夫村と浦郷町に少い。この差異は牧畑耕作の多少と逆関係である。水田の多い所は牧畑耕作の必要性が少く、衰退傾向の大きい所であり、水田の少ない所は牧畑耕作が不利にも拘らずそれに頼らざるを得ず、多く牧畑耕作を残存しているのである。

- (2) 養蚕 養蚕の発達もまた牧畑を減少せしめた。養蚕の発達はようやく明治の末期からであり、明治37~44年は全島で年1万貫の産繭量であつたものが、昭和10年頃は7万貫に達した。<sup>(22)</sup> このような拡大は第一次欧州大戦当時の繭価高に刺激されたものであつて、養蚕の発達は本畑及び牧畑の桑園化を意味し、さらに桑園施肥のための牛舎飼の必要を増し、他方養蚕

才4~21表 桑園面積の変遷

	島 前	島 後	計
明治37年	町歩 46.3	町歩 34.6	町歩 80.9
“ 40年	52.9	80.1	133.0
大正4年	139.5	127.3	266.8
昭和2年	252.2	159.5	411.7
“ 6年	...	...	622.0
“ 9年	358.3	181.5	539.8
“ 25年	54.6	14.8	69.4

- (備考) (1) 明治40~昭和2年は錦織英夫；前掲書25頁より  
 (2) 昭和9年，同25年は島根県，隠岐総合開発計画書17，18頁より  
 (3) 明治37年は県統計書(明治37年度)による。

化と共に牧畑は森林化し、林間放牧に転化して島後の牧畑を潰滅せしめたのである。島前においては殆ど植林は行われなかつたが、明治末期から大正年間の戦争景気による牧畑放棄によつて自然造林で森林化した。

- (4) 漁業 漁業の発達もまた牧畑耕作の減退に影響したのであろう。漁業は大正8年頃発動機船が導入されてから以後に発達したのである。<sup>(26)</sup> それ以前は内海漁業や磯漁業であつて漁撈技術も低かつた。それ故に半農半漁的副業であり、牧畑その他の耕作をやり乍ら魚群の襲来をまち、また海藻や貝類等の漁業であつた。それが漁船が動力化し、漁撈技術が進むと漁業は大規模化すると共に専門化するようになり、牧畑依存から脱却するようになる。それは漁業専門業者の増加と共に、その被備者として年間又は臨時に労働力を提供する者の数を増加し、牧畑耕作の労働力を奪うのである。隠岐島全生産価額中に占める水産物価額の地位は増大の傾向にあるから漁業の雇用力も増大の傾向にあるであろう。かくして牧畑耕作は減退に拍車をかけることとなる。

の集約的労働力利用は牧畑耕作労働の減少に作<sup>(23)</sup>用し、牧畑耕作の衰退に影響したのである。養蚕の最も拡大された大正年間から昭和初期は最も牧畑耕作の減少した時期であり、養蚕の最も多かつた海土村の北部はまた牧畑耕作が衰退した所であることは外にも原因はあるが以上の事情を物語るものである。

- (3) 林業 島後、ことに布施村を中心とする東部<sup>(24)</sup>は封建制時代から植林が奨励、実施され、林地帯を形成している。ことに明治以降運輸の発達、木材需要の増大と高値によつて植林が増大した。明治30年代は最も植林も多く行われた如<sup>(25)</sup>くであり、水田の増加による食糧の水田依存強

(5) 出稼ぎと離村 資本主義経済の発達、ことに第一次世界大戦による好景気は商業と工業を発達せしめ、都市を膨脹せしめた。この現象は農村人口の吸収であり、農民離村の増大である。隠岐島からも京阪神や北九州への出稼又は離村するものが増加し、島の人口は減少し始めた。隠岐島人口は大正5、6年を一転期として減少し、全島在籍人口約4.4万であるが約1.8万が出寄留及び出稼となつた如くである。<sup>(27)</sup>すなわち島内に止まり少ない資源によつて低い生活程度に甘じるより、より高い収益を保証する労力利用に向い、最も低い生産性をもつ牧畑耕作を放棄して離村、出稼したと解しなければならぬ。この世界大戦の好景気時代こそ牧畑耕作の減少が最も甚だしかつた時であり、牧畑が森林化し、牧畑内耕地が減少し、作付回数が減少した時である。それは出稼や離村の増大の外に前述の水田作、養蚕、漁業等の発達とも時を同じうしているのである。

以上のように労力利用や土地利用の上で種々の部門があり、有利な利用を選択して農家の生業とする場合、生産力や収益力の高いかつ労力の楽な部門がとり入れられて、生産性や収益性の低い労力の苦痛度の大きい部門が減少し、放棄されるのである。その生産性や収益性が低く、労力の苦しい部門の才が牧畑耕作なのである。『水産物の高価な時にはより多く漁業に、繭価の好調な時には養蚕業に、木材や木炭の騰貴せる場合には林業へより多く傾倒せしめ、牧畑耕作は時に疎となる。……牧畑の耕作よりも投下資本、労力に対する余剰価値のより多い方面に労力が逃避し、その結果として得たる報酬によつて米麦の如き主要食糧を買換えると云う行為に出たのである』<sup>(28)</sup>。それ故反対に昭和農業恐慌時の如く繭価が暴落し、漁業が不振であり、都市の景気も沈滞すると農村人口も多くなり、低い生産性にも甘じて牧畑耕作の増大を経済更生計画に織込まねばならなかつた。

2. 牧畑耕作における食糧自給の必要性低下 隠岐は島根半島から44軒、境港から54哩の北方海上に位置する4つの大島からなつており、日本海の荒波は交通、運輸の発達しない時代には真に絶海の孤島であつた。そこに生活する人々にとつて食糧の自給は生存のために絶対不可欠な最も重要な事項であつたであろう。山岳が重疊し、島内大部分は山地であつて平坦地に乏しい。この島で人口が増加して来るとこれを養うためには山腹の急傾斜面をも耕作しなければならなかつた。養畜に恵まれた自然的条件によつて古くから牧が設けられていたが、この山岳地の耕作と養畜との結合が牧畑に発展したと考えられる。この土地利用方法は養畜と共に島民の生活を支える食糧を生産したのである。水田や本畑も少なかつたから住民の食糧は牧畑耕作に多く依存していたのである。封建時代の農業技術は停滞していたから、孤立経済における牧畑耕作による食糧自給の必要性は絶対的であり、牧畑耕作の維持、存続を要請したのである。しかるに明治時代に入り、次に述べるように牧畑耕作による食糧自給の必要性は次第に減少してゆき、牧畑耕作存続の支柱は弱まり、衰退傾向を強めたと考えられる。

(1) 食糧移入の可能性増加 封建時代の末期において既に海産物や林産物が本土に積出される

(29)

と、その代りに食糧が移入されるようになるであろう。明治時代になり国民経済が発達し、交易が増加すると移出できるものを生産販売し、食糧を移入した方が有利となつて封鎖的孤立経済から交換経済へ、自給生産から商品生産へと発達して来るのは当然である。牛馬の生産、養蚕、ことに種繭用養蚕、漁業、林業の発達がそれであり、出稼ぎ、離村者からの送金、島内の農業以外諸職業の増大も食糧移入の可能性を増加し、牧畑による食糧自給の必要性は次第に減少してゆくのは当然である。

- (2) 水田、本畑の増加 農業技術がすみ、耕作が集約化すると牧畑の内便利な所は本畑となり、綿布の移入は麻畑の食糧生産への転向を可能にし、水利の可能な所は水田が造成され、それら拡張された水田や本畑は技術の向上と共に益々集約化して生産力を高める。例えば浦郷町において『大正3年から昭和9年までの21年間に……14.9町歩の水田と15町歩の普通畑（本畑）及び桑園25.8町を生じた』<sup>(30)</sup>如く順次牧畑から水田、本畑が分離してゆく。内地の水田が金肥や新品種の導入によつて反収を高めたと同様にここでも生産力を高めたであろう。これら水田、本畑の食糧生産の増加は牧畑耕作の食糧生産の重要性を低めてゆくことになる。前述の如く水田の多い所ほど牧畑耕作は衰退しているのである。
- (3) 米食の普及 社会経済の発達は交換経済の発達であり、生産力の向上と生活程度の上昇を意味する。隠岐、ことに島前においては以前麦や甘藷が常食であつたが、明治時代、ことに日露戦争後から米食が増加していつた。<sup>(31)</sup>さらに大正年間の欧州大戦時の好況によつて増加した。食糧移入の経済力を持つようになったからである。昭和初期の全島における米の消費総額4万石内外の内1.3~1.7万石が内地から移入された。<sup>(32)</sup>さらに日華事変中から米の配給制度が始まり、一層米食を普及せしめ、全消費量の48%を移入するに至つたのである。このような米食の増加は水田造成の刺激となり、水稲作に努力を傾け、牧畑耕作における麦作、豆作の重要性を軽減せしめ、牧畑衰退の一因となつているのである。

3. 牧畑の草生悪化と牧畑放牧の減少 前に述べたような放牧家畜数の減少は草生悪化が主要な原因であろう。牧畑の草生は牧畑の耕耘によつて良好となり、自然草生の約3倍の草が伸びると云われている。<sup>(33)</sup>『耕作衰えれば牧畑は荒廃し、牧畑の荒廃はやがて畜産の衰退を招来すると云う因果関係がある』。<sup>(34)</sup>草生の減少は牧畑内耕地だけでなく、牧畑の森林化が草生を悪くし、その利用を妨げている。すなわち牧畑内耕地の減少と牧畑の森林化による草生地減少が草生を減少せしめたことは否定できない。ことに最近では草生の質も低下し、不良草（例えばヂイノヒゲと云い、カモジグサの一種の如き）が蔓延したと云う。この不良草を村の人は敗戦草と呼び、敗戦後特に多くなつたようである。また灌木その他の障害物の存在も草生をさまたげている。このような草生悪化が放牧頭数を減少せしめていると考えることができる。

他方放牧牛馬の体格は改良の結果大きくなり、一頭当喰草量が増大したので草生量は同じでも放牧頭数は減少するのが当然であるとも云われているが、放牧頭数は実際に最盛時の約1/3に

減じており、草生の悪化は多くの村の人々が認めているところであるから、之による放牧頭数の減少は認められねばならない。

けれども放牧頭数の減少は草生悪化のみならず、養畜労働の収益性とも関係があり、その収益性は牧畑耕作と同様に他の部門の労働収益との比較の問題である。比較的有利な労働雇用が他にあれば労働力はその方に逃避して養畜は衰えるであろう。大正年間の好景気の時に養畜の減少したのは牧畑耕作の減少と同様に、その他の部門に労働力が逃避したと考えられる。昭和10年頃における牛馬の増加は他の部門における不景気の結果と推測できる。しかし牛馬の増減はその価格が比較的高いこと、繁殖、成長に年数を必要とすることにより牧畑耕作の増減より摩擦が大きいためであろう。敗戦当時減少の極に到した放牧頭数も終戦後の家畜の高値により放牧頭数は恢復に向いつゝあるが、前述の摩擦によつてその恢復は遅々としている。

放牧頭数減少が牧畑耕作の減少より少ないことは、牧畑の重心が耕作から牛馬の放牧に移りつゝあることを物語る。このような傾向は前述の如き両部門の労働収益性の差異に原因しているが、さらに厩肥や畜力利用の必要性が水田や本畑の耕作のために重要であつて、耕種生産が家畜飼養を不可欠としていること、放牧を主体とする養畜の労働粗放性と労働力需要が農閑期であることが、養畜の労働収益性の不利な場合もその不利を軽減するに役立つであろう。以上のような理由で家畜の牧畑への放牧は牧畑耕作の減少ほど大きくなかつた。牧畑耕作が殆ど消滅した地方においても林野の草生を利用する放牧の輪換のみが存続しているのである。島後の大久牧畑以外の放牧地、海士村中北部と黒木村の牧畑は実質的には牧畑の耕種と養畜の輪換から単なる牧野における輪換放牧に変質したか、又は変質しつつあるのである。比較的牧畑耕作の多く残っている知夫、浦郷、崎牧畑においても、耕作の減少が大きく、放牧による養畜生産が比較的多く残存しているに過ぎないのである。

**4. 牧畑の私有と共同放牧権との矛盾** 牧畑の所有は細分されて私有されている。その私有は共同放牧以外の使用、収益の自由である。共同放牧への私有権の保留は村民の申合的契約にすぎないが、強制耕作的な土地利用の種々の制限となつて現れている。その強制耕作は耕作技術の向上を妨げて生産力を停滞せしめているのである。放牧以外の使用と収益の自由は耕作の放棄、森林化、囲込みによる本畑化を許し、それらは草生悪化となり、所有者の自由と共同放牧の利益とは矛盾するようになる。牧畑衰退傾向の場合この矛盾は益々大きくなる。また私有権は共同放牧のための諸施設を妨げている。牧野改良を私有権が妨げ、草生改良を妨げているのである。例えば草生改良のための草地管理——炭カル施用、優良牧草導入、障害灌木の除去等、防風林や浸蝕防止林の造成、飼肥料木や庇蔭樹の植栽等は放牧のため必要であるが、私有権と衝突してその実施が困難である。個人的に実施してもその利益は個人に帰つてこないから個人はその実施を思い止まり、個人の利益と共同放牧の利益とは一致しない。ことに放牧のための草生をよくするのに牧畑は耕耘されねばならないが、耕耘は個人の自由に委されてお

その利益は個人に酬いられないから誰も強制出来ない。このように共同放牧のために実施さるべき共同作業が私有権によつて妨げられ、放牧地の改善が行われず、掠奪の利用が続けられて地力は消耗しつつあるのである。牧畑の草生は悪化し、草質は低下し、灌木や叢林が増加し、森林化し、放牧家畜の収容力を低下してゆく傾向にある。ここに牧畑の零細的私有権の分散と共同放牧による無制限的利用の間に大きい矛盾が存在する。牧畑の衰退はこのような根本的な矛盾に原因しているのであつて、それ故に生産力が低いとも云えるのである。

## 第4節 牧畑の農家経済における従属性

### 第1 土地利用と牧畑の地位

牧畑は昔にあつては島内の土地の殆ど全部にわたり拡がつていたらしい。『往時には民家及び普通島（一名麻島、当島、開地、年々島、本島とも云う）は石垣又は木柵にて囲い、民家の瀬戸（後口）に木戸を設けて其処より直に牧場に通じていたと云う<sup>(35)</sup>』。しかしその後、嘉永2年に牧畑内に丸囲いをして耕作していた畑を本畑として囲出し、牧畑を山の方へ押し上げて以来、住宅に近い、耕作に便利な土地は次第に本畑になり、また水利のある所は水田<sup>(36)</sup>になつた。しかし牧畑の面積は浦郷町において最近40～50年の間には大きい変化はないと云う。前述の通り同町において大正3年以後21年間に約55町の水田、本畑、桑園が増加した程度であり、同様に知夫村では本畑2.3町が増加したに過ぎないのである。それ故に現在においても島前においては全土地面積の大部分は牧畑なのである（才3～1図参照）。今回調査の結果によると才4～22表の通りであり、平均約2町の経営地の内牧畑が1.6町（77.8%）で最も大きい。水

才4～22表 経営地の地目構成（浦郷町30戸平均）

農家階層		地目					
		水田	本畑	牧畑	宅地	その他	合計
実数 (反)	A	0.54 <sup>反</sup>	1.68	6.78	0.18	0.07	9.25
	B	1.12	2.88	20.05	0.33	—	24.38
	C	4.84	3.94	31.19	0.47	—	40.45
	平均	1.70	2.53	16.01	0.29	0.03	20.57
百分率 (%)	A	5.8 <sup>%</sup>	18.2	73.3	1.9	0.8	100.0
	B	4.6	11.8	82.2	1.4	—	100.0
	C	12.0	9.7	77.1	1.2	—	100.0
	平均	8.3	12.3	77.8	1.4	0.2	100.0

田1.7反(8.3%)、本畑2.53反(12.3%)できわめて狭少である。耕作規模階層別に見て差があり、B階層(中規模)において最も牧畑割合が大きい。

このような牧畑面積の大きい地位も利用の集約度を考慮に入れるとその地位は順次低下する。牧畑の質的低下は牧畑内耕地を次々に減少し、森林化し、耕作が減じたのである。調査農家平均の牧畑内土地利用の状態は才4~23表の通りである。4年輪換の内1回以上耕作した土

才4~23表 牧畑内地目構成(浦郷町30戸平均)

農家階層		牧 畑				計
		耕 地	林 地	草 地	荒 廢 地	
実 数 (反)	A	2.84	1.58	2.37	—	6.78
	B	8.68	7.23	3.51	0.64	20.05
	C	13.17	9.98	8.04	—	31.19
	平均	6.80	5.05	4.00	0.17	16.01
百 分 率 (%)	A	42	23	35	—	100
	B	43	36	18	3	100
	C	42	32	26	—	100
	平均	42	32	25	1	100

地を耕地と見ると、約1.6町の牧畑中耕地は6.8反(42%)であり、%は階層別に差は認められない。牧畑の耕地以外は林地(32%)、草地(25%)等からなる。すなわち牧畑の半以上は林野である。それでも全経営地の約33%が牧畑内耕地なのである。しかし牧畑内耕地の作付回数は前述の如く減少しており、本畑が大体二毛作(年2.0作)であるのに、牧畑耕作は標準型で4年5作(年1.1作)、現在最も多い4年3作(年0.75作)であり、牧畑の粗放性が判る。

次に農業経営における全作付面積における牧畑内耕地における作付面積の地位を見ると才4~24表の如くである。30戸平均延作付面積は9.4反であるが、内牧畑の作付は3反(32%)にすぎない。耕作規模階層別に見るとやはりB(中規模)階層に牧畑%が高い。それに反して水田%はC(大規模)階層に高く、A(小規模)階層は本畑%が高い。

さらに土地利用を養畜の面から観察する。現在の家畜飼養頭数を放牧畜と舎飼のものを分けて示すと才4~25表の通りである。大部分が牛であり、放牧家畜が飼養家畜の98%を示していることが判る。放牧期間は馬は年間、牛は約240日位であるが、冬季舎飼用の乾草は牧畑で刈られるから依然牧畑にたよっていることとなる。このように養畜の牧畑依存は耕種生産と異なり殆ど全面的であるといえる。

才4~24表 作物別作付面積 (浦郷町30戸平均)

地目 農家階層	作物	水田			本畑										牧畑				合計							
		水稲	れんげ	小計	大麦	小麦	粟	黍	そば	大豆	小豆	蚕豆	甘藷	野菜	柿	桑	その他	小計		大麦	小麦	黍	大豆	小豆	甘藷	小計
実数 (反)	A	0.5	—	0.5	1.2	0.30	1	0	0	0.60	0.20	1.0	0.60	0.2	0.0	1	—	3.40	0.40	0.2	—	0.20	0.4	—	1.2	5.1
	B	1.1	—	1.1	2.0	0.30	1	—	—	1.00	0.1	—	0.60	0.2	—	0.1	—	4.41	1.90	0.40	0.1	0.81	1.0	—	4.2	9.7
	C	4.8	0.4	5.2	2.5	0.70	2	0	—	1.90	0.30	1.0	0.80	0.3	—	0.50	0.1	7.42	1.10	0.2	—	2.10	0.70	0.5	5.7	18.2
	平均	1.7	0.1	1.8	1.7	0.40	1	0	0	1.00	0.20	1.0	0.70	0.2	0.0	0.2	0	4.61	1.20	0.2	0.0	0.80	0.60	0.1	3.0	9.4
百分率 (%)	A	11	—	11	23	6	2	0	0	12	3	1	12	4	0	2	—	65	8	4	—	4	8	—	24	100
	B	11	—	11	20	3	1	—	—	10	2	—	6	2	—	1	—	45	20	4	1	8	11	—	44	100
	C	26	2	28	14	4	1	0	—	11	2	0	4	2	—	2	1	41	11	1	—	12	4	3	31	100
	平均	18	1	19	18	4	1	0	0	11	2	1	7	3	0	2	0	49	13	3	0	9	6	1	32	100

才4~25表 飼養家畜の家畜単位 (浦郷町30戸平均)

		放牧			舎飼			合計
		牛	馬	小計	山羊	鶏	小計	
実数	A	1.17	0.30	1.47	0.03	0.04	0.07	1.54
	B	2.69	—	2.69	0.01	0.02	0.03	2.72
	C	4.71	—	4.71	—	0.04	0.04	4.75
	平均	2.40	0.15	2.55	0.02	0.03	0.05	2.60
百分率	A	76	19	95	2	3	5	100
	B	99	—	99	0	1	1	100
	C	99	—	99	—	1	1	100
	平均	92	6	98	1	1	2	100

## 第2 労働力利用と牧畑の地位

土地利用における牧畑の地位でも判るように、農家は農業経営の一部分又は一部門として牧畑を耕作し、放牧利用しているのである。面積だけでなく集約度を考慮に入れて見るとき牧畑の地位は低くなるのである。才2章において述べられた如く、浦郷町の農家は大部分(68%)が3反未満の過小耕作規模であり、82%が兼業農家なのである。故に農家は種々の方面で働き、所得をあげなければ生活できないのである。牧畑の経営はその種々な労働力利用部門の内の1部門に過ぎない。それでは農家の所得的労働の内牧畑経営にどれだけ向けられ、その地位はど

のようになってきているかを今回調査の結果から見ると才4~26表の通りである。推計であるから

才4~26表 労働配分の推計 (浦郷町30戸平均)

	家族数	労働 力換算	家族 労働 日数 (能力換算)										能力換 算1人 当労働 日数
			総計	水田	本畑	牧畑	養蚕	養畜	林野	漁業	その他 兼業		
実 数 (日数)	A	2.4	341	22	74	22	6	57	—	97	63	171	
	B	2.3	382	46	99	67	5	89	2	54	20	201	
	C	4.0	698	205	162	72	25	150	6	76	2	199	
	平均	2.7	447	76	101	47	11	93	2	80	37	194	
百 分 率 (%)	A	—	100	6	22	6	2	17	—	29	18	—	
	B	—	100	12	26	18	1	23	1	14	5	—	
	C	—	100	29	23	10	4	22	1	11	0	—	
	平均	—	100	17	23	11	2	21	0	18	8	—	

正確ではないが、大体の傾向を窺うに足るであろう。すなわち牧畑耕作のためには平均47日(11%)、養畜のために93日(21%)が投ぜられている。これらは本畑23%、漁業18%、水田17%、その他兼業8%等と同程度の割合である。耕作規模別階層間の傾向を見易からしめるため

才4~27表 牧畑関係労働の地位

	水田本 畑の労 働 %	牧畑関 係労働 %	漁業そ の他兼 業労働 %	計
A	28	23	49	100
B	38	41	21	100
C	52	32	16	100
平均	40	32	28	100

前に前表を集約して才4~27表を作成した。水田、本畑に対する労働は大きい耕作階層ほど多くなり、漁業その他兼業に対する労働は耕作規模の小さい階層ほど多くなり、牧畑関係の労働はB(中規模)階層に最も高くなり、牧畑の耕作と養畜関係で41%の労働を費している。さらに知夫村1農家の牧畑関係労働の地位を見ると才4~28表の通りであり、牧畑耕作に25%、養畜関係に2%、計27%にすぎない。

才4~28表 知夫村1農家の労働配分

	水田	本畑	養畜	牧畑	計
労働日数	229	193	14	146	582
同上 %	40	33	2	25	100

労働力利用上の牧畑の地位は以上のように低いのである。しかも浦郷町においては牧畑関係労働の内養畜労働が約2%を占め、牧畑耕作労働はごく小さい部分しかしめない。

(備考) 岩崎昭; 隠岐島における牧畑経営農家の実態 (島根農林統計協会, 農林統計通報, 7号) より。

### 第3 生産量における牧畑の地位

耕種生産において生産物ごとに本畑と牧畑の生産量を比較すると才4~29表の通りである。

才4～29表 1戸当牧畑生産量と全生産量に対する割合(浦郷町30戸平均)

	牧畑生産量					全生産量に対する牧畑生産の%				
	大麦	小麦	大豆	小豆	甘藷	大麦	小麦	大豆	小豆	甘藷
A	0.6	0.1	0.1	0.2	—	19	12	11	53	—
B	1.7	0.2	0.6	0.4	—	29	34	41	76	—
C	1.7	0.2	0.7	0.4	57	28	16	34	66	13
平均	1.1	0.1	0.4	0.3	13	25	19	29	64	5

牧畑生産量は1戸当平均麦類1石余、豆約7斗等であるが、全生産量に対する各生産物の割合は大麦25%、小麦19%、大豆29%、小豆64%、甘藷5%に過ぎない。小豆のみは割合が大きいが、絶対量は少い。耕作規模別に見ると各生産物ともB階層に大きい。

さらに耕種生産物を合計して比較するため、穀物と甘藷を玄米換算して全生産量に対する牧畑生産量の地位を見たのが才4～30表である。1戸当平均玄米換算約10石の内本畑54%、水田31%、牧畑15%であり、牧畑生産量の割合は少くなる。耕作規模階層別に見ると牧畑生産割合

才4～30表 耕種主要生産物の玄米換算における牧畑生産割合(浦郷町30戸平均)

		水田	本畑								牧畑						合計	
		稲	大麦	小麦	粟	大豆	小豆	蚕豆	甘藷	小計	大麦	小麦	黍	大豆	小豆	甘藷		小計
実数(石)	A	1.00	1.37	0.41	0.05	0.84	0.19	0.05	1.40	4.31	0.33	0.08	—	0.12	0.19	—	0.62	5.93
	B	2.50	2.25	0.41	0.05	1.08	0.09	—	1.60	5.48	0.93	0.16	0.05	0.72	0.38	—	2.24	10.22
	C	8.80	2.42	0.73	0.16	1.55	0.19	0.05	2.72	7.82	0.93	0.16	—	0.84	0.38	0.41	2.72	19.34
	平均	3.20	1.87	0.49	0.11	1.08	0.19	0.05	1.76	5.55	0.60	0.08	0	0.48	0.28	0.09	1.53	10.28
百分率(%)	A	17	23	7	1	14	3	1	23	72	5	1	—	2	3	—	11	100
	B	24	22	4	0	11	1	—	16	54	9	2	0	7	4	—	22	100
	C	46	12	4	1	8	1	0	14	40	5	1	—	4	2	2	14	100
	平均	31	18	5	1	11	2	0	17	54	6	1	0	5	2	1	15	100

はB階層に最も高く、本畑生産割合は小規模階層ほど大きく、反対に水田生産割合は大規模階層ほど大きくなっている。若干の差異が階層間にあるけれども、牧畑生産割合は何れの階層においても、水田、本畑の生産割合より低く、その地位が最も小さいのである。

以上は牧畑における耕種生産について述べたのであるが、養畜生産における牧畑の地位についても触れなければならない。けれども前述した通り全養畜の内牧畑に依存する牛馬の占める割合が平均98%に当たっているから、生産量においても大体同程度の依存度があるであろうと推測できる。牛馬の仔畜、山羊の乳や仔、鶏の卵等を合計し得るのは価額のみであろうからそれ

らについては次項において述べることとし、ここではこれ以上の説明は省略する。

#### 第4 粗所得中に占める牧畑の地位

1. 耕種粗所得中に占める牧畑耕種粗所得の割合 浦郷町における調査の結果は才4~31表才4~31表 耕種粗所得中牧畑耕種粗所得

		牧 畑	水田と本畑	合 計
実 数	A	4,267 <sup>円</sup>	30,652 <sup>円</sup>	34,919 <sup>円</sup>
	B	14,806	48,032	62,838
	C	14,648	103,520	118,163
	平均	9,450	52,339	61,789
百 分 率	A	12 <sup>%</sup>	88 <sup>%</sup>	100 <sup>%</sup>
	B	24	76	100
	C	12	88	100
	平均	15	85	100

の通りであつて、平均で全耕種粗所得約6万円の内牧畑耕種粗所得は1万円に達せず、全体の15%に当る。この15%は耕種生産量玄米換算における牧畑生産量の比率と同様である。階層別では前述と同様にB階層に最大である。

2. 養畜粗所得中に占める牧畑関係養畜粗所得の割合 本調査の結果は才4~32表

の通りであつて、牧畑関係が大部分を占め、平均で34,517円(89%)である。しかしこの比率は飼養家畜の家畜単位換算の比率98%に比し低い。その理由は山羊、鶏が家畜単位の割合には粗所得が多いからである。階層別に見るとA階層に低率であり、B、C階層にやや高い。

3. 農家粗所得中に占める牧畑関係粗所得の割合 調査結果は才4~33表に示す如くである。

平均1戸当農家粗所得約24万円の内牧畑耕種4%、牧畑関係養畜14%、牧畑内林産2%、計牧畑関係粗所得は約4.8万円、20%になる。この20%は牧畑以外の漁業36%、耕種21%に比し少く、その他の兼業の19%

才4~32表養畜粗所得中牧畑関係の養畜粗所得

		牧畑関係	牧畑以外	合 計
実 数	A	17,533 <sup>円</sup>	5,659 <sup>円</sup>	23,192 <sup>円</sup>
	B	31,750	1,693	33,443
	C	74,071	4,914	78,985
	平均	34,517	4,427	38,944
百 分 率	A	76 <sup>%</sup>	24 <sup>%</sup>	100 <sup>%</sup>
	B	95	5	100
	C	94	6	100
	平均	89	11	100

%よりやや多い程度に過ぎない。牧畑関係粗所得の内養畜関係が約70%を占め、耕種関係は約20%にすぎない。牧畑における養畜の重要性が判明する。

耕作規模別に農家粗所得の構成を見るため前表を集約して才4~34表を得た。この表によると牧畑関係粗所得の割合は耕作規模が大きいほど大きくなる。但しこの大きい比率の大部分は養畜関係であることは勿論である。牧畑以外の耕種、養蚕、養畜粗所得計の割合は牧畑関係粗所得の割合と同様の傾向にある。漁業、その他兼業粗所得の割合は以上と反対に小規模階層ほど大きくなっている。A、B階層は漁業、その他の兼業粗所得の割合が最大であり、C階層だ

オ 4 ~ 33表 農家粗所得中に占める牧畑関係粗所得

		牧 畑 関 係				牧 畑 以 外						合 計
		耕 種	養 畜	林 産	小 計	耕 種	養 畜	養 蚕	漁 業	其 他 兼 業	小 計	
実 数	A	4,267 <sup>(円)</sup>	17,533	887	22,687	30,652	5,659	3,309	117,298	44,913	201,831	224,518
	B	14,806	31,750	5,813	52,369	48,032	1,693	1,875	71,625	37,488	160,713	213,082
	C	14,643	74,071	8,186	96,900	103,520	4,914	10,170	43,922	61,752	224,278	321,178
	平均	9,450	34,517	3,903	47,870	52,339	4,427	4,527	87,998	46,862	196,153	244,023
百 分 率	A	2%	8	0	10	14	3	1	52	20	90	100
	B	7	15	3	25	23	1	1	33	17	75	100
	C	5	23	2	30	32	2	3	14	19	70	100
	平均	4	14	2	20	21	2	2	36	19	80	100

オ 4 ~ 34表 粗所得の構成比

	牧畑関係粗所得の%	牧 畑 以 外			合 計
		耕種養蚕 養畜粗所得%	漁業 所得%	其 他兼業 粗所得%	
A	10	18	72	90	100
B	25	25	50	75	100
C	30	37	33	70	100
平均	20	25	55	80	100

けは牧畑以外の耕種、養蚕、養畜粗所得計の割合が最大であり、3階層共に牧畑関係粗所得の割合は最小である。

#### 4. 農家の現金収入の内牧畑関係現金収入の割合

この計算は困難な問題を含んでいる。それは本畑生産物と牧畑生産物の間に代替性があり、何れの生産物を販売してもそれは代替性があるからである。故にここでは

穀物の販売は何れの生産物にせよ両者の生産量に按分して計算した。又養畜生産と林産は増殖

オ 4 ~ 35表 現金収入関係の粗所得中の牧畑の割合

		牧 畑 関 係				牧 畑 以 外					合 計
		耕 種	養 畜	林 産	小 計	耕種、養蚕、養畜	漁 業	其 他 兼 業	小 計		
実 数 (円)	A	795 <sup>(円)</sup>	17,533	887	19,215	9,972	115,185	44,913	170,070	189,285	
	B	1,970	31,750	5,813	39,533	3,645	69,947	37,488	111,080	150,613	
	C	3,754	74,071	8,186	86,010	19,416	42,508	61,752	123,676	209,686	
	平均	1,761	34,517	3,903	40,181	10,526	86,164	46,862	143,552	183,738	
百 分 率 (%)	A	0	9	1	10	5	61	24	90	100	
	B	1	21	4	26	2	47	25	74	100	
	C	2	35	4	41	10	20	29	59	100	
	平均	1	19	2	22	6	47	25	78	100	

価額がでているが、これは何時か販売されるから現金収入と見なした。このような前提で計算した結果が才4～35表の通りである。この表によると平均約18万円の現金収入があるが、内牧畑関係は約4万円であつて、全体の22%に当る。その22%の内19%までが養畜であり、耕種と林産はごく少い。牧畑の耕作は現金収入では問題にならない小額であることが判る。しかし養畜の19%は比較的大きく、牧畑以外の耕種、養畜、養蚕の計6%より多いが、漁業の47%、その他兼業の25%より少い。現金収入における兼業の絶対的重要性が判明する。耕作階層別に見て牧畑関係の現金収入は、ことに牧畑関係養畜現金収入の割合は耕作規模が大きい階層ほど大きくなり、漁業収入の割合はその反対に小さい階層ほど大きくなる。それ故にA、B階層では牧畑以外の漁業とその他の兼業の現金収入が最も重要であり、次いで牧畑の養畜であるが、C階層では牧畑の養畜現金収入が最大であり、牧畑以外のその他の兼業と漁業がそれについている。斯くの如く牧畑の養畜現金収入は大きい耕作規模階層で重要な地位を占めているが、規模が小さくなるに従いその地位は低下する。

5. 生産物の家計仕向額における牧畑生産物の割合 ここでは調査不備のため薪については考慮せず、食糧の家計仕向のみについて見ると才4～36表の通りである。この表によると家

才4～36表 家計仕向価額中の牧畑の割合

		耕 種				養 畜 (鶏のみ)	漁 業	合 計
		水 田	本 畑	牧 畑	計			
実 数 (円)	A	7,700	21,169	3,472	32,341	779	2,113	35,233
	B	18,094	28,280	12,836	59,210	1,581	1,678	62,469
	C	62,293	32,296	10,889	105,478	4,600	1,414	111,492
	平均	23,210	25,673	7,689	56,572	1,884	1,834	60,290
百 分 率 (%)	A	22	60	10	92	2	6	100
	B	29	45	21	95	2	3	100
	C	56	29	10	96	4	1	100
	平均	39	42	13	94	3	3	100

計仕向額の約94%は耕種生産物であり、養畜、漁業生産物の家計仕向は少ない。平均で見ると耕種生産物家計仕向の内本畑生産物が42%で最も多く、次いで水田からの米が39%であり、牧畑生産物は13%で最も少ない。本畑生産物の家計仕向割合は耕作規模の小さい階層ほど大きく、反対に水田生産物たる米の家計仕向割合は大きい階層ほど大きく、牧畑生産物はB階層に最大であり、牧畑耕作への依存度は作付面積、労働配分、生産物量、粗所得等全部B階層において最大であると同様である。A階層はすべてにおいて漁業、その他兼業に、C階層はすべてにおいて水田、本畑、養畜に重点があり、B階層はそれらが比較的少く、牧畑耕作の依存度

が大であるのである。

## 第5 結 び

以上は牧畑の地位が土地利用，労働力利用，生産物量，粗所得の内でのどのようなかを見てきた。要約すると牧畑は土地利用面積では約78%を占めているが，粗放的利用であるため，農家の延作付面積では約32%にすぎない。家族労働力利用では牧畑耕作は約11%を占め，穀物生産量や耕種粗所得中の牧畑耕作の比率は約15%，農家粗所得中の牧畑耕種粗所得は4%，家計仕向額中牧畑耕種生産物は13%であるが，農家現金収入総額の内牧畑耕種生産物は1%にすぎない。このように牧畑耕作の地位は低い，しかし牧畑への放牧，採草による養畜生産の重要性はより大きい。すなわち飼養家畜の家畜単位数の内放牧牛馬は98%を占め，養畜粗所得中の放牧牛馬粗所得は89%であつて，養畜部門中で絶対的地位をもつ。さらに全経営の内での牛馬の地位を見ると，まず家族労働力利用において21%を，全粗所得中の14%，現金収入中の19%を占め，牧畑耕作の割合より大きい地位をしめている。牧畑の耕種と養畜を合せて見ると農家粗所得の20%，現金収入の22%，家計仕向の13%，家族労働力利用の32%を占めている。粗所得の地位では漁業，牧畑以外の耕種生産に次いで3位，現金収入の地位では漁業，その他の兼業に次いで3位，家計仕向の地位では水田，本畑に次いで3位，家族労働力利用の地位では水田，本畑，漁業の各々よりも多くなつているが，水田と本畑の計より少い。

このように畑牧は農家経済の所得部面において1小部門を占めているだけであつて，或は漁業より，或は水田や本畑の耕種生産より，或はその他の兼業より地位は低いのである。牧畑は島民の所得経済において既に従属的な，副次的な1小部門になり下がつているのである。故に牧畑経営方式とか，穀草式かそれとも主穀式とか，一つの経営方式として論ずる価値を失つていのではないだろうか。牧畑農業は経営における1小部分の土地利用方法であり，土地利用方式の1種にすぎないと考えられる。それは自家用程度の僅かの蔬菜作を取入れた経営が蔬菜作経営とか，園藝式経営とか云わないで，農家所得の重要部分が蔬菜作からきている場合に初めて云いうるのと同様である。またわが国に焼畑や切替畑は残存しているが，それらは経営内の極く少部分をしめているに過ぎないのであつて，焼畑式経営や切替式経営は殆ど存在しないのと同様である。

(37)

ついでながら牧畑が経営の殆ど全部をしめていた時代における経営方式は穀草式であるか，<sup>(38)</sup>主穀式であるか，<sup>(39)</sup>有畜輪栽式であるかの問題に若干ふれておきたい。牧畑が穀草式に似ている点は牧畑の休閑地（空山）が牧草地の役割をなし，1年放牧されて明年耕作される（麦山）こと，各耕区に垣を囲らし1定期間放牧すること等であるが，大きい差異は穀草式が1農場の耕区制であり，その数耕区に牧草を栽培し，そこだけで数年間放牧し，他の耕区に穀作を数年継続して，地力消耗と共に順次牧草栽培耕区に交代してゆく所謂地目交替であるに比し，牧畑で

は駄よけの粟、稗（近年においてはごく少部分の作付であり、それ自身が飼料を目的とするものでなく、採草する権利を確保するために作付されるに過ぎない。勿論昔は食糧生産であつたであろう）以外は牧草栽培を行わず、ただ冬穀作と夏穀作を4年間に3～5回作付して、その作付前後、または休閑中に放牧するだけであり、牧草栽培の草地と穀作の耕地との地目交替は存しないのである。ただ1年間の休閑中には雑草が自然生育して放牧されるから牧草地の役割を果たすが、それは穀草式の牧草地と異なり、単なる1年の休閑耕地にすぎないと見られる。さらに牧畑は土地が細分化され、交錯していて、村又は部落（古い村）としての耕区（牧）があるのであつて、穀草式の如き農場単位の耕区は存在しない。これらの差異によつて牧畑は穀草式であると云い難いように考えられる。

有畜輪裁式と云うのは輪裁式と同じ意味であろうが、この輪裁式と牧畑の差異は休閑が牧畑に存在し、輪裁式に存しないこと、牧畑は放牧であるが、輪裁式は舎飼であること、根菜作や荳科飼料作が輪裁式には存在するが牧畑にはないこと等から牧畑は輪裁式ではないと云う。有畜輪裁式は作物の規則正しい輪作と家畜飼養の結合した経営方式の意味に使われる場合は輪裁式経営の誤解であろう。

さらに主穀式の三圃式と比較するに、両者とも永久放牧地を有すること、穀作のみの輪作であること、休閑地が存在すること、刈後地や休閑地に部落民に放牧権があつて放牧されること、従つて耕作は強制耕作とならざるを得ないこと、耕地が細分化され、交錯していて、部落としての耕区又は牧に分散していること等は良く似ている。ただ異なるのは主穀式は多く三圃式であるが、牧畑は四圃式であること、主穀式は穀作が麦があるが、牧畑の穀作は麦と大小豆であること、主穀式の三圃式の耕地は土地割換があるようであるが、牧畑にはそれがなく、土地私有となつていた如くであること等である。これらの差異にも拘らず経営方式として牧畑は主穀式経営に最も類似点が多いと考えられる。<sup>(40)</sup> 両者共に封建時代の農業であつて、粗放的な低い農業技術と村や部落の統制下に維持されてきたのである。

以上の如く昔の牧畑は歐洲の経営方式に比べて穀草式や輪裁式よりも主穀式に近いのであるが、橋本博士が述べられる如く牧畑は『主穀式の四圃式農法とでもいうべきものかも知れないが、しかしつくりははまらない。むしろありのまま隠岐独特の牧畑式としておくのがもつともよいと思ふ。<sup>(41)</sup>』と考えられる。

論旨は横道へそれたが、以上述べた如き牧畑の従属的、副次的性格は如何にして生れたかについて考えるに、それは結局既に述べた牧畑の衰退の原因の全部に帰せねばならないと思ふ。島前においては昔牧畑が農業経営の大部分であつたであろう。それが衰退すべき原因が発生して牧畑は次第に減少してゆくのである。それを個別経営について見れば、牧畑依存の度合が次第に減少し、それに代つて水田作、本畑作、養蚕、漁業、その他の兼業が入り、次第に大きい地位を占めるに至つたのである。このような個別経営における変化がとりもなおさず牧畑の地

位を次第に下げ、牧畑の従属的、副次的地位をもたらしたと解さなければならない。職業の分化によつて、島氏の生業を専門化せず、各個の農家が種々と生産部門を兼ねるようになったのは何故であろうか。漁業の如きは一部専門化し、又牧畑の消滅した地方では水田作や畑作をする農家・林業農家等を専門化したか、牧畑を多く残している地方では資本や資源に恵まれず、専門化する程の有利な条件をもたなかつたため、生産力が低く、多種多様な所得部門を併せることによつて、ようやく家族労力力の雇用と生活に必要な所得を確保し得たに過ぎなかつたからである。生産力の低さこそが牧畑の存続を可能にしたのである。

### 引用文献

- |   |   |
|---|---|
| (1) 錦織英夫；島の農業形態—隠岐の牧畑式農業経営について—(島根県総合開発資料No.9, 島根県複製版) 14~16頁 | (21) 田中豊治；前掲書, 62頁                      |
| (2) 細川善麿；隠岐牧畑の展望(島根県総合開発資料No.10, 島根県複製版) 11~13頁               | (22) 細川善麿；前掲書, 25頁                      |
| (3) 久保佐土美；隠岐ノ牧畑式ノ研究(鳥取農学会報1の3, 別刷) 18~19頁                     | (23) 錦織英夫；前掲書, 34頁                      |
| (4) 中国農業試験場農業経営部；中国の農業地域研究—隠岐の牧畑経営—, 77~82頁                   | (24) 布施村；布施村の林業, 2頁                     |
| (5) 田中豊治；隠岐牧畑の衰退と農家経済(農業と経済10の8) 54~73頁                       | (25) 田中豊治；前掲書, 66頁                      |
| (6) 中国農試経営部；前掲書, 25頁  | (26) 細川善麿；前掲書, 24頁                      |
| (7) 田中豊治；前掲書, 58頁   | (27) 細川善麿；前掲書, 8頁, 27頁<br>田中豊治；前掲書, 69頁 |
| (8) 細川善麿；前掲書, 32頁   | (28) 細川善麿；前掲書, 26頁                      |
| (9) 細川善麿；前掲書, 31頁   | (29) 田中豊治；前掲書, 65頁                      |
| (10) 三井計夫；牧野, 84頁   | (30) 久保佐土美；前掲書, 89頁                     |
| (11) 錦織英夫；前掲書, 7頁   | (31) 錦織英夫；前掲書, 31頁                      |
| (12) 久保佐土美；前掲書 9頁   | (32) 錦織英夫；前掲書, 31頁                      |
| (13) A. T. センブル著 牧野忠夫訳；世界草地改良図説, 60~61頁                       | (33) 錦織英夫；前掲書, 8頁<br>細川善麿；前掲書, 29頁      |
| (14) 錦織英夫；前掲書, 9頁, 細川善麿；前掲書 29頁                               | (34) 細川善麿；前掲書, 28頁                      |
| (15) 節川善麿；前掲書, 32頁  | (35) 錦織英夫；前掲書, 5頁                       |
| (16) 四宮恭二；隠岐の牧畑農業(経済学雑誌, 3の5) 1頁                              | (36) 元浦郷村長, 今崎半太郎氏談話                    |
| (17) 浦郷町；隠岐の牧畑(謄写刷), 9頁                                       | (37) 久保佐土美；前掲書, 1~3頁                    |
| (18) 細川善麿；前掲書, 5頁   | (38) 石田竜次郎；隠岐島前の牧畑(地理学評論5の2) 101~102頁   |
| (19) 田中豊治；前掲書, 64~65頁   | (39) 細川善麿；前掲書, 5~6頁                     |
| (20) 久保佐土美；前掲書, 11頁   | (40) 橋本伝左衛門；隠岐島記(農業と経済, 19の7) 56頁       |
|   | (41) 同上 58頁                             |